株式会社TOHO

令和6年12月19日取材

まちのごみ拾い活動は、「私たちにできること」として続けている大切な活動です。

電気設備の設計・施工から通信設備の施工、空調設備工事、家電の販売・取付などを行う株式会社TOHOは、電気に関する地域の困りごとを解決する「住まいのおたすけ隊」の事業も行っていることから、地域の方々の“頼れる存在”でもあります。創業50周年を過ぎ、ますます地域貢献にも力が入るお二方に、始めたきっかけや、やりがいなどを伺いました。

代表取締役社長　早川　英雄さん（右）

安全品質責任者　大崎　雄一さん（左）

趣味は、お二方ともカブトムシやクワガタの採集・育成

― ごみ拾い活動を始めたのはいつごろですか。

早川さん：６年ほど前です。この活動を始めた背景には、私たちの経営理念が深く関わっています。1973年の創業以来、皆さまに「豊かな暮らし」と「住みよい社会」を実感していただくために、私たちに何ができるのかを考え、実現のためにさまざまなチャレンジをしてまいりました。その一環として、まずはごみを拾うという活動を通して、地域に根ざす企業になろうと思いました。これは社内にもよい影響を与えていまして、社員同士の結びつきが強くなり、日常業務の中でもチームワークが向上していると感じますし、地域とのつながりの深まりを実感しています。将来的に、「TOHOがこのまちにあってよかったね」と思っていただけたらうれしいですね。

― どれくらいの頻度で行っているのですか。

大崎さん：当初は年４回ほどでしたが、現在では３月・６月・９月・12月に実施するのに加えて、不定期で２回行い、合計６回に増えています。約30分かけて、社員全員で行っています。いまでは、月・水・金の朝10分間ほどですが、会社周辺の清掃も行うようになりました。エリアは太白区柳生２丁目を中心に、１丁目と７丁目も加えた範囲を設定し、３つの班に分かれて効率よく作業を進めています。私自身は、普段からカバンやポケットにごみを集める袋を忍ばせておき、通勤途中に見つけては拾っています。ごみを拾うこと自体、気持ちがいいですし、拾うことを経験すると、落ちているごみが気になり始めるというか、よく見えるようになるんです。

通行する人と社員の安全を確保しながら

― どのようなときにやりがいを感じますか。

大崎さん：普段は目につかない植え込みの中のような場所に、隠すように捨てられたごみを拾ったときです。もちろん、地域の方から「ありがとう」と声をかけられることも励みになります。また、私たちの仕事上、普段から事業で排出されるごみも分別をしっかり行っているのですが、アレマ隊の活動でもそれを実行することで本業での分別にもより力が入るようになりました。事業で出るごみは、分別せずに「混合ごみ」として回収してもらうと、分別して出すときよりも余計に費用がかかるのです。ですから、アレマ隊の活動で身につけたごみを分別する習慣が、事業で排出されるごみの分別にも活かされ、回収にかかる費用の削減につながるという相乗効果も生まれています。

― ごみ拾い活動は、会社の中でも「当たり前の活動」として、定着しているのですね。では、活動を続ける中で注意したいことや改善したい点など、見えてきたことはありますか。

早川さん：道路沿いでの作業時に、通行人の安全を確保することです。毎回、交通整理の担当を決めて、自分たちの安全にも配慮していますが、今後も気を緩めることなく続けていきたいと思います。また活動後に行われる社員間での振り返りや感想共有によって、職場の雰囲気がよくなるというメリットもあり、企業文化をさらに豊かにするきっかけにもなっています。今後もこの活動を通して、地域とともに成長していきたいと考えています。

― 最後に、今後の目標をお聞かせください。

大崎さん：ご近所にも同様の活動を行う地域企業がいくつかありますので、その方々と連携して一斉清掃を実現したいと考えています。

早川さん：ごみ拾い活動を経験する人が増えれば、ごみを捨てない意識が高まり、地域の美化がさらに進むと期待しています。実は、私は柳生・西中田商工振興会の会長を務めており、地域のイベントに参加する機会が多くあります。子どもたちを対象にした「カブトムシバトル」などは、私が企画から運営までを行っており、今年も多くの子どもたちに楽しんでもらえました。これからも学校や町内会とも協力しながら、ごみ拾い活動をはじめ、地域を盛り上げるようなことができればと思っています。

【株式会社TOHOのごみ拾いスタイル】

火ばさみを手に持ち、軍手もしくは各々が用意した手袋を手にはめて、ごみ拾いをしています。地域の方々にもTOHO社員であることがすぐに認識できるよう、会社のユニフォームを着用するのがTOHOのごみ拾いスタイルです。町内会長の勧めで、活動日やエリア、場所などを活動中の写真とともに記録し、データを残しています。